【特集】下田市景観計画を見つめ直す

専門家による現地調査を実施しました！ −静岡県景観形成推進アドバイザー制度の活用−

令和４年10月24～25日に下田市景観まちづくり審議会の作業部会を実施しました。現在市では、前号でご案内したように、平成21年に策定した「下田市景観計画」の改定作業を進めており、市内各地の現地調査や会議、検討を重ねています。

今回は、里山の風景が残り、稲作風景も見ることのできる稲梓地域を重点的に検証し、また、これまでに現地調査を実施した浜崎・朝日地域について専門的評価を受けることを目的に、東京農業大学地域環境科学部造園科学科教授　荒井　歩　先生をお招きし、荒井先生が専門分野とされている里山景観や、これまで全国の自治体に出向き、アドバイザーや審議委員などを務められている先生のご経験から、下田市をどのように見られるのか、率直なご意見を伺いました。

初日は白浜地域を国道135号を車で走りながら見ていただき、その後稲梓地域の現地調査に同行いただきました。加増野地区を訪れた際には報本寺の富永住職からお話を伺うことができ、また加増野地区の農業景観における稲作風景、里山景観を見ていただきました。

荒井先生からは、「稲梓地域は確かに稲作の風景や里山の景観が残っている。“下田＝海”という印象を、特に観光客などは強くイメージするが、“山の景観”がこのように残っていることは地域の貴重な財産。また、加増野地区のようにお寺が地区の拠点として確立し、それを中心として地域が一体となっていることが素晴らしい。」といった評価をいただきました。

２日目はこれまで作業部会で現地調査を行った浜崎・朝日地域を視察しました。朝日地域は前日の稲梓地域と同様に、稲作風景と里山景観が残っているエリアです。荒井先生からは、前日の稲梓地域と関連付けて、「例えば、全国の自治体や地域から農業振興の観点における景観活用の助言を求められます。その際にいつも質問されるのが「何を栽培したらいいですか?」という内容です。これについては、「これを栽培すれば良い。」という正解はありません。もちろんその地域、地区の特産に力を入れることも良いでしょうし、商品価値が高い作物や、６次産業化につながる作物に絞って取組むこともまた正解です。大事なのは、「その活動を地域が一体となって進めること」そして「次の世代につなげていきながら継続的に活動していくこと」この2点です。こうした活動の掘り起こしのために、地域住民が参加するワークショップを開催することも方法の1つです。そうした取組みから景観活用のガイドブックのような刊行物を作成し推進していくこともできます。いずれにせよ、地域が一体となって何をするのか、どう取り組んでいくのか、それを住民の方々が共有することが大事ですね。」このように助言をいただきました。

静岡県景観形成推進アドバイザー制度とは…

景観分野の専門家を、市町の要請により県が派遣します。各市町は、専門的立場からの助言を受けたい時や、市民向けに講座を開催したい際、県を通じて専門家に依頼することができます。また、依頼に関する費用は県が負担し、市町の景観施策を強力に支援してくれています。

〈現地調査の様子〉

加増野地区・報本寺で富永住職からの聞取り
（前列中央 荒井先生）

現地調査時に荒井先生との意見交換
（稲梓地域・加増野地区）

現地調査終了後の荒井先生との振返り
（会場：中央公民館）

コラム ―「伝えていくという難しさ」―

今年の１月８日早朝、およそ20年振りにある行事へ参加した。正月飾りや書き初めで使った半紙などを焼き、焼けた松の枝を家に持ち帰って玄関先に飾ることで、１年間の火除けを願う。残り火で焼いた餅や団子を食べ、今年１年の無病息災を願う行事、「どんど焼き」だ。今から20年以上前、私は小学生の頃に子供会の行事として参加していた。前日から公民館に泊まり、翌日６年生を中心に班に分かれ、早朝から地区内を子供会の役員である大人たちと練り歩いた。「どーんど焼きだー、みんな起きろ！」とお決まりの台詞を大声で言いながら、家の玄関先に置かれた正月飾りを集めて回った。

こうした行事を子どもながらに経験できたことで、何となく地域の年中行事を覚えるきっかけにもなり、火の扱い方を大人から教わることもできた。このように、子どもたちが地域の大人と交流することは、子どもの教育にとっても良い機会であり、なにより地域のコミュニティとしてのつながりを持てていたと思う。

今年参加していた子どもはおそらく10人もおらず、消防団として参加した私や、子供会の役員、地域の大人たちの方が断然多かった。もちろん子どもの数が少なかったこと自体が悪いわけではなく、少子化の影響や、コロナ禍で人混みを避けたい心情もあるだろう。ただ、早朝から真冬の寒さに耐え、火の熱さと力強さを間近に感じた後、水平線から登ってくる太陽とそれに照らされる波の美しさは、20年前に見た景色と変わらず、大人になった今でも感動する、懐かしいふるさとの景色の１ページであった。この感動と、寒い中で朝ご飯代わりに食べる餅の美味しさを、ぜひ地域の子どもたちにも味わってもらいたかった。

景観施策の効果（活用と評価）

旧町内に設置したポケットパークが第15回静岡県景観賞優秀賞を受賞しました！

令和４年度第15回静岡県景観賞において、下田旧町内のポケットパーク「大工町プレイス（設計：㈱地域まちづくり研究所、施工：㈱外岡組）」・「弁天橋ボードウォーク（設計：同上、施工：㈱土屋建設）」と、その周辺の公共空間（道路舗装面の修景）整備、それらを活用したこれまでの事業が評価され、優秀賞（日本造園建設業協会静岡県支部賞）を受賞しました。

この２つのポケットパークは、令和元年度に整備し、令和２年度より供用を開始しました。同時期に整備した周辺道路の修景舗装や、隣接する歴史的建造物との調和を図るよう設計したことによって良好な景観が形成されたこと。また、その中でこれまで取り組んできた、屋外空間を有効に活用してきた実績（令和２年度 屋外空間有効活用検証業務 ㈱ヘッズ東京本社）を評価していただきました。

静岡県景観賞は、こうした「良好な景観」と、そこで行われる「活動」の２つが選考条件となっています。良好な景観が形成されている地区又は施設において、それらの形成や保全に対し、住民団体やNPO、企業や学校、地元自治体などが主体となり、景観の保全、活用に寄与しているものが対象です。その歴史は古く、賞の名称が途中で変更されていますが、昭和63年度に第１回静岡県都市景観賞としてはじまり、現在まで続いています。市内では、平成６年度の第７回静岡県都市景観賞において旧町内の「ペリーロード」が最優秀賞を受賞したほか、「大賀茂川ボードウォーク」が第11回優秀賞（静岡県建築士会賞）、「ペリー上陸記念公園」が第18回優秀賞（静岡県建築住宅まちづくりセンター賞）を受賞しており、今回で4度目の受賞となりました。

❖ 審査委員からのコメント ❖

２つのポケットパーク整備は、近接するペリーロードと連結することで、より情緒ある下田らしい回遊散策景観の創出に成功しています。

大工町プレイスでは歴史的資産が、弁天橋ボードウォークでは南国らしい植栽計画が、魅力的な景観形成に役立っています。

既成のまちの要素や資源を細かな視点のもとに粒立たせ、小規模でありながら街に華をもたらし、このエリアの魅力を相乗的に高めています。

供用開始直後の大工町プレイス（左）と弁天橋ボードウォーク（右）

◇コロナ禍における屋外空間の有効活用について市民・専門家・行政による検討会の様子

◇放置竹林対策「竹あかり」のにぎわい創出
［実施：下田商工会議所］

◇民間事業者によるサテライトショップの出店
［協力：㈲かめむら生花店］

100年後の誰かも、感動させたい。

『静岡県景観賞30周年記念誌』（平成29年（2009）11月発行）には、このように謳われています。

～たとえば、風景が1枚の絵画だとするならば、景観は一篇の小説である。そこにはいつも、人がいる。当たり前を打ち破ろうとする人。受け継いだものを繋ごうとする人。無くした誇りを取り戻そうとする人。新しい価値を創り出そうとする人。未来を想って動こうとする人。わたしたちが美しい景観に心動かされてしまうのは、目に映る風景の中に彼らの物語を感じているからではないだろうか。その物語が続くかぎり、美しい景観は積み重なっていく。50年後も、100年後も、きっと。～

今を生きる私たちは、50年後の人たちに、100年後の人たちに、それまでにどのような物語を積み重ね、どれほど感動する小説を書き残していけるでしょうか。みんなで考え、取り組んでいきましょう。物語の積み重ねを。